

● 沖縄

上地 隆裕

まず総論から述べる。一シーズンを通じて、当県でもCOVID19の影響が激減・本来の洋楽クラシカルの波が次第に復活した。具体的に言えば、洋楽クラシカルの摂取および沖縄スタイルの血肉化が進み、それが加速度的に好ましい結果を生んだ年でもある。中でも出色だったのは、本格的な琉球オペラ（出演者の主役＝尚寧王＝田里直樹を筆頭に、阿応理屋恵＝王妃アオリヤエ役＝宮城美幸、以下、芸術監督・作曲の新垣雄、そして演出担当の横山由和、マグラ親方に至るまで実力者を配した純県産の二公演）「アオリヤエ」だ。そのスケール感、当県では比類のないもので、琉球舞踊団、琉球太鼓、更に高レベルなクワイア（浦添市少年少女合唱団など）を絡ませるといって、まさしく「ローカルの挑戦」とは思えない公演を実現した。しかも同二公演は完売の大成功を収め、県内を本拠に活動する演奏芸術家たちに大きな刺激を与えたのである。確かに、細部の彫琢の不備をあげつらえば色々出て来るが、ここではあえて次の課題に言及するのみで、幕とした方が最善の遇し方だと思う。

そしてその課題とは、県内では大きな関心呼び、大盛況に終わった同演目が、県外ではどのように評価されるか、あるいは果たして評価される水準に達していたものだったか、に対する議論の場を設けることだ。筆者の考えでは、少なくとも、オペラという総合芸術のジャンルを立派に踏襲している故、グローバルな達成度をめざして上演されたことは間違いないと思う。

次にアンサンブル（交響管弦楽）の面だが、惜しかったのは、本県洋楽壇にとって刺激となるような外来の名流団体（数少ない例外は邦人グループの「葵トリオ」）や国際コンクール受賞歴を持つ個人（同じく亀井聖矢＝ロン・ティボー国際ピアノコンクール優勝者＝ら）による公演に恵まれなかったことだ。が、このジャンルは、今後COVID19の消滅と共に、解決されて行くと思う。その反面、そんな事情が地元勢の躍進を助けたことを見逃してはならない。例えば特に洋楽クラシカル演奏家の補給基地とも言える県立芸大は、シーズンの公演表を全てNETを通じて紹介しているが、一見すれば同大の機能が十全に働いているのが理解できるし、本県唯一のプロ楽団・琉球交響楽団（RSO）も、定期その他の公演シリーズを着実に進め、（特にゲスト・ソロイストに、我が国の旬の若手演奏家を次々に招くのは有難かった）、データの面でも、過去の演奏実績をクロノロジカルにまとめ、未来の研究者の資料集めに資するような工夫を忘れない（この点は、他の団体、琉球フィルや、沖縄響（六十八回目の定期公演を達成）、そして琉球大学管（本年度創設五十年目を迎え、六十五回目の定期公演を実現）等も同様だった）のは大いに評価されてよい、と思う。

続いて方一つの楽器と言える「演奏施設」にも動きがあった。現在本県の中心的な演奏施設は「なはーと」演奏会場だが、同館が現れる以前の須臾会場は「那覇市市民会館」であった。その長きにわたって本県の洋楽壇を支えて来た施設が老朽化を理由に「取り壊し」と決まったことは寂しい限りだ。

続いて中央で活躍する県出身の報告をも加えておきたい。まず沖縄に近い場所から紹介すると、九州響でファゴットの首席を守る宇根康一郎、読売日響の上里友二、ソプラノの砂川涼子、チェロの上地さくら、ヴァイオリンの上地美実ら、本欄の常連は、昨シーズンも相変わらず活躍を続けた。彼や彼女達の切り開いた地平が今後ますます後進の挑戦に役立つことを願うのみだが、その後進と目される人々は、海外留学の実績を本県各地で披露しながら、チャンスを窺っている。

そして予告編として最後に、付け加えたいのは、筆者が過去十数年に渡って継続中の、浦添市前田高地付近における米軍属GI達を相手にした「オルグ」活動（詳細は次回）だ。 (完)

上地隆裕（うえち・たかひろ）

沖縄県在住、1948年沖縄県宮古島市（旧城辺町）生まれ。琉球大学法文学部卒業後最初の渡米。通算五年の滞米生活を経験。最終学歴はメリーランド州立大学教育学部大学院修士課程（専攻は心理学・カウンセリング）修了。

帰国後、沖縄県人材育成財団の派遣により、ニューヨーク大学にて一年間研修。学業の傍ら、全米・全世界の各地の演奏団体、音楽院の取材を続ける一方、数百名の独奏家、指揮者らと対談、それらの内容を在京の月刊誌、その他の刊行物で発表した。

主な著書：「世界のオーケストラ」（四部作）（芸術現代社・刊）ほか多数